

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 7 月 6 日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720045

研究課題名(和文)「文化資本としてのマンガ」の思想的影響に関する国際比較

研究課題名(英文) International comparism of manga's ideological influence as "cultural capital"

## 研究代表者

吉村 和真 (YOSHIMURA, KAZUMA)

京都精華大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：00368044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、マンガを文化資本の一つととらえ、そのマンガが持つ思想的影響について、日本・韓国・シンガポールの比較検討を実施した。その結果、日常的な流通市場によって身体化されたレベルにある日本、学校教育や行政の介入を通じて制度化されたレベルが際立つ韓国、複数の国や言語の作品によって客体化されたレベルが増加しているシンガポール、という構図を確認することができた。

以上の考察結果は、現地の出版社、学校、書店への取材やアンケート、マンガ作品の調査に基づいて得られたものである。研究成果物については、テーマとの相性もふまえ、学習マンガの形態でまとめ、日・英・韓の三ヶ国語で表記した。

研究成果の概要(英文)：This research is to compare the ideological influence of Manga as cultural capital in Japan, Korea and Singapore.

As a result, we could confirm the differences in the level: in Japan, the distribution market of manga in daily life is making manga to embodied cultural capital, in Korea, it seems to be more institutionalized cultural capital, supported by the government and educational system, and finally in Singapore, manga as objectified cultural capital, which can be found in different languages and made by several countries' artists.

Those studies are results of researches, basing on the interviews and results of questionnaires of publishers, schools, bookstores and analyzing the manga works and products in Japan, Korea and Singapore. The presentation of this study's result is done in 3 languages- Japanese, English, and Korean-, in form of an educational manga, fitting to the research's theme.

研究分野：思想史・マンガ研究

キーワード：マンガ環境の国際比較 文化資本 マンガ教育 マンガリテラシー マンガ市場 メディア環境 ポピュラーカルチャー研究 学習マンガ

## 研究成果の概要（和文）

本研究では、「文化資本」としてのマンガが持つ思想的影響について、日本・韓国・シンガポールでの比較検討を実施した。

その結果、日常的な流通市場によって身体化されたレベルにある日本、学校教育や行政の介入を通じて制度化されたレベルが際立つ韓国、複数の国や言語の作品によって客体化されたレベルが増加しているシンガポール、という構図を確認することができた。

以上の考察結果は、現地の出版社、学校、書店への取材やアンケート、マンガ作品の調査に基づいて得られたものである。研究成果物については、テーマとの相性もふまえ、学習マンガの形態でまとめ、日・英・韓の三ヶ国語で表記した。

## 研究成果の概要（英文）

This research is to compare the ideological influence of Manga as cultural capital in Japan, Korea and Singapore.

As a result, we could confirm the differences in the level: in Japan, the distribution market of manga in daily life is making manga to embodied cultural capital, in Korea, it seems to be more institutionalized cultural capital, supported by the government and educational system, and finally in Singapore, manga as objectified cultural capital, which can be found in different languages and made by several countries' artists.

Those studies are results of researches, basing on the interviews and results of questionnaires of publishers, schools, bookstores and analyzing the manga works and products in Japan, Korea and Singapore. The presentation of this study's result is done in 3 languages- Japanese, English, and Korean-, in form of an educational manga, fitting to the research's theme.

研究分野：思想史・マンガ研究

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：マンガ環境の国際比較、文化資本、マンガ教育、マンガリテラシー、マンガ市場、メディア環境、ポピュラーカルチャー研究、学習マンガ

### 1. 研究開始当初の背景

およそ1990年代より、国内では、夏目房之介『手塚治虫はどこにいる』（筑摩書房、1992年）や四方田犬彦『漫画原論』（筑摩書房、1994年）に代表される、マンガ表現論が浸透するとともに、海外でも、ジャクリーヌ・ベルント『マンガの国ニッポン 日本の大衆文化・視覚文化の可能性』（花伝社、1994年、佐藤和夫・水野邦彦訳）を筆頭に、マンガやア

アニメーションなど日本のポピュラーカルチャーに対する学術的関心が高まっていた。

2000年代には、複数の大学でマンガ関連の学部・学科・コースが新設され、マンガに関する卒業論文も多数執筆されるなど、もはやマンガ研究はアカデミズムにおいて定着した感がある。また、国際的にも注目度の高い領域であり、マンガ研究に従事する留学生・研究者も急増。事実、1984年に設立されたフランス・アングレームの「国立バンド・デシネ研究センター」は日本マンガも視野に入れた「国立バンド・デシネ国際研究センター」を2009年6月にリニューアル、韓国・富川ではマンガによる産業・文化振興を目指す「富川漫画・映像振興院」が2009年9月に開館、中国・上海でも「上海動漫画博物館」が2010年6月に設立するなど、マンガ研究の広がりは国際的動向となっている。

かかる背景を踏まえ、申請者が所属する京都精華大学国際マンガ研究センター（2006年度開設）では、これまで2度の国際学術会議を開催した。欧米やアジアから10カ国・約30名の研究者より、各国のマンガ事情に関するレポートや国際的マンガ研究を実現するための問題提起を集約するなど、国際比較を軸としたマンガ研究を牽引している。

## 2. 研究の目的

### (1) 本研究の全体的目的

マンガリテラシー＝マンガの読み描き能力を、文字の読み書き能力と同レベルで捉えることにより、マンガが人間の思想や価値観、嗜好、感性、行動様式などに与える影響力を、本質的かつ多面的に把握すること。

マンガリテラシーの基礎的文法とその習得過程について、思想史・社会史・文化史・メディア論・マンガ表現論など、領域横断的な観点から検討し、研究素材としてのマンガの可能性と課題を広く提起すること。

マンガリテラシーの習得者＝マンガ読者 が海外で着実に増加している近年の動向をふまえ、「マンガを読む」という行為が日常生活に定着する過程と影響力の国際比較を行い、その観点から今後の国際社会の思想史的展開を示すこと。

### (2) 本研究の具体的目的

マンガリテラシーの国際比較から、社会的・文化的・政治的土壌の違いがマンガ読者の思想や価値観、感性等にどのような影響を及ぼすかを考察すること。

身体化・制度化・客体化された「文化資本」としてマンガを分析することによって、領域横断的な研究素材としてのマンガの有用性と重要性を喚起すること。

近年のマンガの海外進出を踏まえ、マンガ読者が多数の構成員なりつつある社会の思想史的考察を行うとともに、インタカルチャーとしてのマンガの意義を模索すること。

## 3. 研究の方法

上述した研究目的に沿い、以下のような方法と手順で考察を進めた。

### (1) アンケート調査および取材に基づく「文化資本としてのマンガ」の実態の国際比較

主な調査・取材先は下記の通り。

日本：京都精華大学、京都国際マンガミュージアム、京都大学、京都市内の中学校

韓国：韓国漫画映像振興院、ソウルアニメーションセンター、韓国アニメーション高校、京畿芸術高校、京都精華大学大学院マンガ研究科修了生のマンガ家 2 名

シンガポール：現地紀伊國屋書店、チェン・リム氏（中学教員・マンガ研究者）

身体化レベルについては、マンガリテラシーの習得過程、図画や映像といった 2 次元表現そのものへの親和性など、主に小学生時代までのマンガ環境に関するアンケート調査を実施した。制度化レベルについては、マンガを教科におく学校現場へ、カリキュラムの理念や授業運営の工夫、生徒・学生の反応などについて取材を行った。客体化レベルについては、公開された出版データやコンテンツ白書、出版社や書店への取材をふまえ、各国のマンガ市場の最新事情およびこの 10 年の変遷に関する情報を収集した。

それぞれのアンケート集計、取材記録、市場情報をふまえ、韓国語・英語担当の研究協力者とともに、日本・韓国・シンガポールの実態について比較結果の整理と分析を進めた。

## （ 2 ）学習マンガによる研究成果の制作

上記の一連の作業をふまえ、学習マンガ「文化資本としてのマンガ」の思想的影響に関する国際比較」を制作した。発表媒体は、マンガ関係施設・研究者への広報効果、京都国際マンガミュージアムに関心を持つ一般への広報力、速報性などの利点に鑑み、現在、京都国際マンガミュージアム内に設置されている、京都精華大学国際マンガ研究センターのホームページとした。日・韓・英の三ヶ国語で発表する。

## 4 . 研究成果

本研究の目的は、ピエール・ブルデューが提唱した「文化資本」概念をふまえ、身体化・制度化・客体化の三つのレベルから、日本・韓国・シンガポールの比較を通じた「文化資本としてのマンガ」の思想史的考察を行うことにあった。結論から言えば、それぞれのレベルに応じて、三カ国の特徴を当初の予測をより実証的に検証することができた。

まず日本の場合、すでに身体化レベルが日常的に定着しているが、そのことは、一般の書店だけでなく、コンビニエンスストアや新古書店での市場が、三カ国の中でも唯一着実に広がっていることから理解できた。マンガ雑誌・単行本の発行部数および販売額自体は 1995 年を境に右肩下がり状態だが、この 3 年間でも雑誌・単行本を合わせた国内の総流通数は約 10 億冊から 9 億冊を推移しており、現在も国際的に突出した数を示している。刊行雑誌のタイトルは軽く 100 を超え、年間 1 万点近くの単行本が発行されるなど、性別や年代によって細分化された市場が広がっていることも日本の特徴であり、「身体化レベルの文化資本」としてのマンガの存在の大きさが改めて浮き彫りになった。

一方、日本では 2000 年代に入ってマンガ・アニメ関連施設が急増、個人記念館や総合的資料館などを含めて現在約 70 の拠点があり、自治体や出版社の協力のもとマンガに接する環境が広がりを見せている。中でも 2006 年に京都市と京都精華大学の共同事業として開館

した「京都国際マンガミュージアム」は年間約 27 万人の来館者を動員し、文部科学省や文化庁の事業を複数受託するなど、「制度化レベルの文化資本」としての側面も増えている。そのことは、2000 年代に入って、マンガの名を冠した学部・学科やマンガに関する科目が増加している点にも表れている。

次に韓国の場合、韓国漫画映像振興院への取材と、韓国の二つの高校へのアンケート調査を実施し、韓国における「制度化および客体化レベルの文化資本」の事例を把握した。韓国のマンガおよびアニメ教育は、国家政策として整備されたカリキュラムと設備環境を有しているが、国内のマンガ市場規模は年を追うごとに下降しており、マンガ家やアニメーターを志望する卒業生たちのキャリア支援が大きな課題となっている。そうした実態がありながら、今もマンガ関連の教育機関に進学する生徒たちの声を集めたアンケート結果からは、「マンガ大国・日本」への憧れや追従だけでなく、自国のマンガ文化に対する期待と不安を具に確認することができた。なお、アンケートの回収数は計画段階で設定していた 100 人を超える 150 人となった。

また、日本にマンガのために留学、京都精華大学大学院芸術研究科で修士号を取得し、現在韓国でマンガ家として活動している 2 名へのインタビューを実施。出版社との契約のもと雑誌をベースに作品を発表する日本のマンガ家と異なり、オンラインコミックを意味する「ウェブトゥーン」での発表をメインに、出版の際には公共の経済的支援を受けつつ執筆活動を継続するというケースも少なくない韓国のマンガ家の実態を把握した。そこには日本とは違った国境を超えやすいメディアによる展開がある一方で、公共の制度的規制によって作品のテーマや表現の自由度が低くなる現実がある。「身体化レベルの文化資本」としてマンガが日常にあふれる日本との違いは、こうした表現活動のインフラの在り方にも関係している。今後も、マンガ市場のメカニズムやその歴史の理解がいっそう求められる。

続いてシンガポールの場合、日本・韓国と大きな違いは、多言語・多文化がその背景に根ざしている点にある。もちろんこれはマンガに限らない点だが、シンガポール国内最大のマンガ売り場を取材した際、日本マンガの翻訳版の多さはもとより、多国籍のマンガの存在によっていっそう明瞭になった。言語の多様性は、そのまま思想や宗教の多様性に繋がる道筋をもっており、国際都市として近年成長著しい同地にあって、日本マンガの位置付けは大きいながらも中心ではないことも確認された。同時に、マンガに限った受容ではなく、そこに連動するアニメーション、キャラクターグッズ、雑誌や単行本の付録など、メディアミックスを総合的に享受するファンの多さが際立っていた。例えば、マンガ雑誌の付録カードを求めて店舗に客が殺到する様子などは、日本のオタク層を想起させるが、それに対する社会的まなざしは比較的緩やかであり、閉じたマニアックな評価とは一線を画している。

こうした「客体化レベルの文化資本」としてのマンガの実態把握については、紀伊國屋シンガポール支店、および、現地の中学校教員兼マンガ研究者への取材に基づいている。そ

の作業は、マンガやアニメを手がかりに、アイドルやファッション、音楽にまで視野を広げる、「J-POP」「COOL JAPAN」の良き理解者にして消費者としての、シンガポールの実態を把握する結果でもあった。しかしそれは、表面的な流行の追従だけを意味しない。例えば、日本ではすでに忘れられつつある「劇画」の命名者・辰巳ヨシヒロの作品と人生を称えた映画「TATSUMI」が、シンガポールの監督によって制作され、欧米で高く評価されながらも、日本では配給先すら求めにくいという現状にも表れている。世界中で発信される文化の一つとしてマンガを文字通り「客体的レベルの文化資本」としてとらえ、単なる消費だけでなく新たな生産事例を散見できるシンガポールには、日本や韓国とは異なる展望がある。

以上のように、日本・韓国・シンガポールの基本となる文化資本の有様については予測通りだったが、この研究期間の調査を通じ、身体化・制度化・客体化、それぞれの要素の結び付きやバランスを具体的に把握することができた。マンガ研究は国際的の広がりを見せているが、それぞれの国・地域の情報発信に留まる事例もある中、本研究は具体的な国際比較を実現した。同時に マンガ読者 は現在進行形で世界各地に広がっており、マンガリテラシーを軸に日本の思想史・社会史の位置付けを明らかにすることは、今後の国際的展開を見据えた思想史研究にとっても有意義であったと確信している。

なお、これらの研究成果は、学習マンガの形態で公開することにした。比較対象を考慮して、日本語・韓国語・英語の3ヶ国語に翻訳し、京都国際マンガミュージアムの企画と運営に携わっている京都精華大学国際マンガ研究センターのホームページに掲載する。

## 5. 主な発表論文等

学会発表（計4件 うち招待講演4件）

吉村和真「原爆マンガを読む 「痛み」と「風景」と「言葉」から」、立命館大学土曜講座、2014年6月14日、立命館大学

吉村和真「“クール”で“ワンダー”な日本マンガ事情」、帝塚山学院大学国際理解公開講座、2014年7月12日、狭山市さやかホール

吉村和真「マンガの影響力について考える 子供マンガを手がかりに」、京都大学現代史研究会、2014年7月26日、京都大学

吉村和真「「マンガの顔」の歴史から私たちの感覚変容に迫る」、京都女子大学公開講座、2014年11月13日、京都女子大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉村 和真 (YOSHIMURA, Kazuma)

京都精華大学・マンガ学部・教授

研究者番号：00368044